

青い草

小川未明

青空文庫

小さい姉弟は、父の目が、だんだん見えなくなるのを心配しました。

「お父さん、あのカレンダーの字が、わからないの？」と、壁の方を指していったのは、もう前のことでもあります。お父さんが、会社をやめてから、家の内にも夜がきたように暗くなつたのです。

「私の故郷へ帰りましょう。田舎は、都会とちがつて、困るといっても、田はあるし、畑があるし、まだゆとりがあります。いけば、どうにかならないこともありますまいから。」と、子供の母親がいました。

「お母さん、田舎へ帰るの。」と、姉のとし子は、お母さんの体へすがりながらききました。

「ええ、帰りましょうね、そうするよりしかたがないんですもの。

」

お母さんは、みんなの気持ちを励ますつもりで、いいましたが、また、すぐに涙ぐんでしまいました。

「おれに故郷があるとなあ。」と、父親は、瞳が白くなつて、せいきうしな生気を失つた目で、あたりを見まわしながら、答えました。お父さんには、もう、両親もなければ、また帰るべき家もなかったのです。

「どちらの田舎へ帰つても、同じではありませんか？ 私の兄はあ

のとおりしんせつな人ひとですし、まだ母ははも生きていますし。」と、お母かあさんはいいました。

「そうすれば、僕ぼく、田舎いなかの学校がっこうへ上あがるの。」と、義坊よしぼうが、ききました。

「おまえも田舎いなかの子こになるのよ。山やまへいたり、野原のはらをかけまわったりして、きつとじようぶになりますよ。とし子こは、もうあと二年ねんですから、卒そつぎ業ようしたらお裁縫さいほうでも習ならえばいいと思おもいます。」

父親ちちおやはだまつて考かんがえていたが、

「できるなら、子供こどもたちをこのまま、こちらで勉強べんきようさしてやりたいものだな。」といいました。

「あなた、それができるようなら、これに越こしたことがありませんけれど、そのお体からだでこの先さきどうしてやっていけますか？」

母はは親おやは、自分じぶんになんの力ちからもないのを、面めん目ぼくなく思おもったのです。

「なに、私わたしにだつてすこし考かんえがある。」

父ちち親おやはさびしく笑わらいながら、二人ふたりの子供こどものいる方ほうを向むいて、

「おまえたちは、お母かあさんの田舎いなかへ帰かえったほうがいいのか、それとも、こちらで、いくら不自由ふじゆうをしても暮くらしたほうがいいのか、どちらがいいかな？」とききました。

もうまったくの子供こどもではなく、いくらかものわかるとし子こは、この際さいいかに負まけぬ気きであつても、それはむだなことと思おもいまし

た。それよりか、お母さんのおつしやるように田舎へ帰つて、自分**ぶん**はどんな手助け**てだす**でもするから、一家**か**のものが、無事**ぶじ**に暮らして**く**いけることを願**ねが**つたのでした。

「私**わたし**はお母さん**かあ**の田舎**いなか**へいったほうがいいと思**おも**うわ。」と、とし子は、答**こた**えました。

「僕**ぼく**は、賢**けん**ちゃんや、正**しょう**ちゃんと別**わか**れるのはいやだから、こつちに**い**るほう**が**いい。」

今年**ことし**から、小学**しょうがっこう**校**が**へ上**あ**がったばかりの義坊**よしぼう**が**い**いました。
父親**ちちおや**は、手**て**さぐりで義坊**よしぼう**の頭**あたま**に手**て**を置**お**いて、

「義坊**よしぼう**や、おまえと二人**ふたり**でこちらに**い**ようか。」

「お父**とう**さんと、お母**かあ**さんと、別**わか**れるのは**い**やよ。」と、とし子**こ**は、

泣なきながらいいました。

母ははおや親おやもだまつて、そつと目めの涙なみだをふきました。

「まあ、私わたしはやつてみる。こうなれば、恥はじも外がいぶん聞きもない。明日あす

からでも、町まちの角かどに立たつて、尺八しゃくふを吹ふくつもりだ。」

日ひごろから、お父とうさんの尺八しゃくふに感かんしん心しんしている一家いつかのものだけ

れど、世間せけんの人ひとたちが、はたして自分じぶんたちと同じおなように感かんしん心しんす

るか、また感かんしん心しんはしても、金かねを恵めぐんでくれるだろうか、まつた

く見けん当とうがつかかなかつたのです。

「お父とうさんは、うまいんだから、みんながきつと、お金かねをくれる

よ。」

「この時節じせつですもの、なんでお金かねになどなりますものか。」と、

お母^{かあ}さんはいいました。

まち^{まち}の角^{かど}に石造^{いしづく}りの銀行^{ぎんこう}がありました。前^{まえ}に、三坪^{つぼ}にも足^たらぬあき地^ちがあつて、そこへ青^{あお}い草^{くさ}が芽^めを出^だしました。低^{ひく}い柵^{さく}には鎖^{くさり}が張^はられていたが、大人^{おとな}なら造作^{ぞうさ}なくまたいで入^{はい}ることができたのです。義坊^{よしぼう}の父^{ちち}親^{おや}が立^たつて尺八^{しゃく}を吹^ふくのはその柵^{さく}のところでした。

「いつか、よつぱらいが、たおれていたところへ草^{くさ}が芽^めを出^だした。」と、義坊^{よしぼう}はいいました。どこのおじさんであつたか知ら^しないが、お勤^{つと}めの帰^{かえ}りによつぱらつたとみえて、黒^{くろ}い外^{がい}套^{とう}は泥^{どろ}だらけであつたし、握^{にぎ}っている洋傘^{こうもり}が、折^おれそうに、曲^まがつてい

ました。巡査が見たら、なにかいうであろうと、義坊は、心配をしたが、そのとき、巡査は通ったけれども目に入らなかつたようです。その後、雨が降りつづきました。その雨で草が生えたのでありましょう。

土曜の日には、早くからここへきて、父親は尺八を鳴らしたのでした。

ふいに、義坊が叫びました。

「あつ、あんな花が咲いた！」

小さな白い花が、草に咲いたのであります。ガラス窓のうちで、仕事をしている人にもまた、この舗道を通る人々にも、おそらく、この花は知られなかつたでしょう。ただ、これに気のついた

のは、自分ばかりのように思えて、義坊は、なんだかうれしくてしかたがなかつたのです。

彼は、柵の下から頭を突つこんで、腹ばいになって、その花を取ろうとしました。こんな遊びは、原っぱでもなければされぬこととで、このにぎやかな町の中では、まったく珍しい、しがいのあるいたずらにちがいません。義坊は手を伸ばして、その白い花を取ろうとしました。その瞬間です。どこから飛んできたか、朽ち葉色のちようが、花に止まろうとしました。義坊は、おどろいて急に手を引つこめて、ちようのするさまをじつと見守つていました。ちようは花にとまって、羽を休めたかと思うと、また舞い上がって、煤煙と物音で、かきにごされている空を、

どこともなく飛んで消えてしまいました。その行方を見送りながら、義坊はぼんやりとして、不思議に思つたのです。そして、ちようのために、白い花を残しておく気になりました。

「義坊や、あつちのお店では売れたかな。」

二間とは離れぬところへ、赤い珠と、白い珠と吹き上げるおもちやの噴水や、ばね仕掛けのお相撲の人形を売る、露店が並んでいたのです。

「さつき、子供がたくさん立っていたが、だれも買わずにいつてしまったよ。」

「そうか、不景気だなあ。」と、父親は、ため息をつきました。まだ、今日は一人も銭を投げてくれなかつたのです。

義坊よしぼうは、以前いぜん、いろいろなおもちゃを父親ちちおやから買かつてもら
 ったことがありました。しかし、いまは噴水ふんすいや、相撲すもうの人にんぎよ
 形うなどを見みても、自分じぶんには縁えんの遠とほい気がきしたし、べつにほしい
 とも思おもいませんでした。ただ、そんなおもちゃを買かうことのでき
 る子こは、しあわせな子供こどもと思おもっていました。デパートの屋根やねには、
 アドバルーンがたか高く上あがっていました。風かぜが寒さむく、雲くもが低ひくかつた
 のです。近所きんじよの店みせで鳴ならす、蓄音機ちくおんきの音おとが、いつかお母かあさん
 の田舎いなかへいったとき、丘おかの下したの小学しょうがっこう校こうで、女おんなの先生せんせいがひい
 ていたオルガンの音おとを思おもい出ださせました。
 その先せん生せいは、紫むらさき色いろの、長ながいたもとのついた羽織はおりを着きてい
 ました。

「お父さん、不景気でだめだから、お母さんの田舎へいこうね。」
 義坊は、こういいました。なぜか、お母さんの田舎へいこう
 という不幸な父親は、いつでも、だまってしまうのです。

「また雨かな、だいぶ寒くなった。もう、すこしやって、お家へ
 帰ろうな。」

父親は、尺八を持ち直して、思いきり深く息を吹き込みまし
 た。

うさぎ追いしかの山 小ぶな釣りしかの川
 夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷

道^{みち}を急ぐ人々の中には、立ち止まって、じつと耳^{みみ}をすます青
 年^{いねん}がありました。また、女^{おんな}の人^{ひと}がありました。その人^{ひと}たちは、

しまいまでその歌うたに聞ききとれていました。

こころざしをはたして いつの日ひにか帰かえらん

山やまはあおき故郷ふるさと 水みづは清きよき故郷ふるさと

と、父親ちちおやが、うたい終おわつたときに、あちらからも、こちらか

らも、お銭あしが二人ふたりの前に落おちたのであります。義坊よしぼうは拾ひろうのに

夢むちゆう中ちゆうでありました。

やがて、草くさの白しろい花はなが、うす闇やみの中なかにほんのりとわからなくな

るころ、哀あわれな父親ちちおやのたもとにすがりながら、勇いさんで帰かえつてい

く子供こどもがありました。それは義坊よしぼうであります。

沈しずみがちあるに歩ちちおやく父親ちちおやに向むかつて、

「ねえ、お父とうちゃん、きようはよかつたね。また、あしたもあん

な^{うた}歌を吹^ふきなさいよ。
「と、いったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

初出：「教育行童話研究」

1938（昭和13）年4月

※表題は底本では、「青《あお》い草《くさ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年3月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い草

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>